

1-1-2021

Alternative Expressions from a Cross-Cultural Pragmatic Perspective

Lina Abdel Hamid Ibrahim Ali,
Cairo University, Faculty of Arts, Department of Japanese Language and Literature

Follow this and additional works at: <https://jfa.cu.edu.eg/journal>

Recommended Citation

Ali,, Lina Abdel Hamid Ibrahim (2021) "Alternative Expressions from a Cross-Cultural Pragmatic Perspective," *Journal of the Faculty of Arts (JFA)*: Vol. 81: Iss. 1, Article 16.
DOI: 10.21608/jarts.2021.61753.1066
Available at: <https://jfa.cu.edu.eg/journal/vol81/iss1/16>

This Original Study is brought to you for free and open access by Journal of the Faculty of Arts (JFA). It has been accepted for inclusion in Journal of the Faculty of Arts (JFA) by an authorized editor of Journal of the Faculty of Arts (JFA).

異文化間語用論における代案提示表現について
—日本語配慮表現の原則に焦点を当てた分析—^(*)

Lina Abdelhameed Ibrahim Ali
Faculty of Arts Cairo University

**Alternative Expressions from a Cross-Cultural Pragmatic
Perspective**

Abstract

This study focuses on giving alternative expressions in Japanese and Egyptian dialect from the perspective of cross-cultural pragmatics. It targets the differences in FTA reduction strategies and expression selection, as well as the degree of politeness and consideration in alternative presentation expressions. As a result, it is found that in Japanese, "asking for permission" of "giving and receiving auxiliary verbs" is the expression with the highest degree of consideration while in Arabic asking for permission or using the question form "asking for information" conveys consideration for the other party.

Keywords: Cross-cultural Pragmatics , Suggesting alternatives , Giving and receiving auxiliary verbs, Degree of Consideration, Face Threatening Act

حول التعبيرات البديلة من وجهة نظر علم البرجماتية عبر الثقافات
المختلفة

د/ لينا عبدالحميد ابراهيم علي

ركزت هذه الدراسة علي التواصل اللغوى بين الثقافات المختلفة بالتركيز علي تعبيرات
إبداء الحلول البديلة في اللغة اليابانية من منظور علم البرجماتية عبر الثقافات المختلفة
وباستخدام مبادئ التعبيرات التحفظية في اللغة اليابانية.

^(*) Bulletin of the Faculty of Arts Volume 81 Issue 2 January 2021

وإستهدفت الدراسة أيضا الاختلافات في الاستراتيجيات اللغوية المستخدمة في اللغتين اليابانية والعربية للتخفيف من حدة التعبيرات ووقعها علي المستمع ومدي تعبيرها عن الإحترام للأخر .

أثبتت نتيجة الدراسة والتحليل أن اللغة اليابانية تستخدم التعبيرات المعبرة عن " طلب الإذن" والتي تعبر عن درجة عالية من الأدب واحترام الأخر، بينما في اللغة العربية تستخدم صيغة السؤال، وتعبيرات طلب الإذن في الاستراتيجيات المستخدمة في علم البراجماتيه-. بالتركيز علي تحليل مبادئ التعبيرات التحفظية في اللغة اليابانية.

要旨

本研究では、異文化間語用論の観点から日本語の代案提示表現を取り上げて、分析を行った。また、話し手が選択する表現によって生じる負担の度合いを考察し、日本語とエジプト方言アラビア語（以下、アラビア語とする）両言語の FTA 軽減ストラテジー及び表現選択の違い、代案提示表現の丁寧さ・配慮の度合いの観点から対照した。その結果、日本語では恩恵を受けていない発話者による「授受補助動詞」の許可求めが最も配慮が高い表現となっていることが分かった。一方、アラビア語は許可求めを表す表現形式と同様に疑問形による情報求めを用いることにより、相手に配慮が伝わるようになった。

1. はじめに

異文化間語用論とは、異なる文化的背景を持つ言語使用者によって遂行される言語行為の研究であり、文化の違いが言語コミュニケーションにどのように反映するのかを語用論⁽¹⁾の枠組みを用いて研究する分野である（清水 2009）。異文化間語用論の観点から日本語とアラビア語の代案提示表現を対照した研究が管

見の限りない。また、両言語の代案提示の発話において FTA を軽減するために使用される配慮の戦略にはどのような相違点が存在するのかについて未だ不明確である。そこで、本研究では異文化間語用論における配慮表現の観点から日本語とアラビア語エジプト方言⁽²⁾（以下、アラビア語）の代案提示発話に焦点を当て、両言語の FTA 軽減戦略及び表現選択の違いについて考察を行う。

2. 研究意義及び研究目的

リナ（2015）では、日本語とアラビア語の「理由説明」の意味公式における配慮表現について対照研究を行った結果、日本語母語話者は話者の事情を小さく述べる、つまり「自己の負担が小さいと述べよ」の配慮の原則が働いている（山岡・牧原・小野 2010）ことが分かった。一方、アラビア語では「自己の負担が大きいと述べよ」という新たな原則が働くことを明らかにした。このような配慮の原則の違いが両言語母語話者のコミュニケーションに大きな影響を与え、時には誤解や摩擦をもたらす原因の1つにもなると考えられる。また、アラビア語母語とする日本語学習者の母語転移の原因の1つとも言える。従って、両言語の配慮表現の原則の違いを明らかにする意義があり、アラビア語母語とする日本語学習者の日本語教育にも役立つと思われる。

本研究では代案提示表現に焦点を当てて、他人と良好な人間関係を維持するために用いられる配慮の原則や戦略を探る。そして、日本語の配慮の原則をアラビア語に適応できるかどうかについて考察を行

う。

3. 理論的枠組み

本研究では、Leech (1983)及び山岡他 (2010) の日本語の配慮表現の原則を参考にしながら両言語の代案提示発話を分析し、先行研究ではこれまでに取り上げられてきた配慮表現の原則で両言語の発話を記述しきれぬのか、新しく提示できる原則があるかを検討する。

4. 先行研究

代案提示とは、「相手の要求に応えられない場面に置かれた際、その拒否行為によって生じる FTA を軽減するため、相手に解決方法を見つけ出すものである」とする。では、FTA 行為とは何かについて以下で詳しく論じる。

Brown and Levinson (1987)によると、人間には、他人とのコミュニケーションにおいて 2 つの基本的欲求があり、その欲求がフェイスに例えられ、人間誰もが 2 つのフェイスを持っているとされている。ここで言うフェイスは、人の面子やプライドを表している。それらの 2 つの欲求は、他者に受け入れられたい、好かれたい、評価されたいという欲求が「ポジティブ・フェイス」、他者に邪魔されたくない、立ち入られたくないという欲求が「ネガティブ・フェイス」であるとされている。この 2 種類のフェイスを脅かさないように配慮するストラテジーを「ポライトネス」と捉える

。そして、「ポジティブ・フェイス」に働きかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、「ネガティブ・フェイス」に働きかけるストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼んでいる。

それぞれのフェイスを脅かす行為は「Face Threating Act. (以下 FTA とする)」とされている。人は本来他人と良好な人間関係を築こうとするが、FTA を全く行わないと、人間と接することができないということになってしまう。通常、話し手と聞き手の間に行われるコミュニケーションには、FTA が生じる場合が多くある。本研究では「代案提示」という発話行為に焦点を当てて、FTA を緩和する表現について検討したい。「代案提示」は本来、他人の要求に応じることができない際に、他人との人間関係を良好に保つため使用されるものとする。

Brown and Levinson (1987)の FTA 行為は以下のように分類されている。

I. 聴者の消極的フェイスを脅かす FTA

①聴者に何らかの行為をさせようとする行為

例：命令、依頼、提案、助言など

②聴者に利益を与える話者の未来の行為

例：提供、約束など

③話者が聴者や聴者の所有物に対する欲求を表す行為

例：聴者への賞賛、怒り、肉欲などの表出

II. 聴者の積極的フェイスを脅かす FTA

①話者が聴者に対して否定的な評価を示す行為

例：不賛成、批判、不満表明、反論など

②話者が聴者の積極的フェイスに配慮しないことを示す行為

例：厳しい感情表出、聴者に関する悪いお知らせ、話者に関する良い話題、対立を招く話題など

Ⅲ. 話者の消極的フェイスを脅かす FTA

①感謝表明

②聴者側の感謝の受け入れ

③弁解

④聴者からの提供の受け入れ

⑤聴者が犯した無礼の反応

⑥不本意な約束や提供

Ⅳ. 話者の積極的フェイスを脅かす FTA

①謝罪

②賞賛の受け入れ

③身体制御が利かなくなる

④ごまかし、自己矛盾、とぼけなど

⑤罪や責任を認めること、感情の抑えが利かなくなる

以上、Brown and Levinson (1987)が指摘した FTA 行為を見てきたが、FTA がいつでも、どの発話内容でも同様なわけではない。発話の中で様々な要因により、その FTA の度合いの大きさが異なる。以下は、B&L が提示した FTA 度計算式 (Computing the Weightiness of an FTA) である。

FTA 度計算式 (Computing the Weightiness of an FTA)

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

$D(S, H)$: 話者 S と相手 H の社会的距離 (social distance)

$P(H, S)$: 相手 H の話者 S に対する相対的力 (power)

R_x : 特定の文化で、行為 x が相手にかける負担度 (ranking of imposition)

相手が目上の人か目下の人か、相手が親しいか親しくないか、そして、地位が高い相手かそうでないかにより、相手にかける負担度が異なる。目上の相手や地位の高い相手の場合、負担度が高くなることはどの言語でも共通する要因だと考えられる。また、同じ言語行動でも、文化や社会的通念が異なることにより、その言語行動の負担度や、解釈も異なってくる。B&Lでは、文化的差異を R_x で表している。

山岡他 (2018) では「《要求》は当然ながら《付与》を期待するとされ、以下の例文が挙げられている。

(1) A: 塩を取って。

B: はい、どうぞ。

上記のことを考えると要求を行う側は、それに対して何らかの利益をなす行為を相手から期待していることが言える。相手の期待に添えないときには、相手の

利益を奪うことになるため、配慮表現の使用が必要不可欠であると考えられる。つまり、代案提示は、Leech (1983)の「気配りの原則」(b) 他者の利益を最大限にせよ、と(寛大性の原則) (b)「自己の負担を最大限にせよ」に違反する発話となるだろう。従って、他者(話し手)との人間関係を良好に保つため、別の解決案を出す際に何らかの配慮を示すことが必要になってくるのではないかと考えられる。例えば、以下の作例が挙げられる。

(2) A: ちょっと手伝ってくれないかな。

B: ごめん、今ちょっと忙しいんで、Cさんに頼んで

みたらどう!

上記の発話では、BさんがAさんの要求に応じることができない状態にあるため、別の案で間接的に拒否していることが分かる。この「Cさんに頼んでみたらどう!」は代案提示の意味公式に当たる部分である。しかし、表現の選択によって、代案提示の丁寧さやその配慮の度合い及び発話に働く配慮の原則が異なる。筆者が2015年ではDCT調査によって収集した日本語のデータでは、「~てください」と、「~たらどうですか」、「~てくれる」、「~てもらっていい」などのような表現が選択されることが分かった。一方、アラビア語のデータでは、許可求めを表す「Mumken」(~てもいいですか)、と否定による疑問形「~いない?」(他にできるひとがいない?)、命令形の3つが挙げられる。しかし、その中でどれが最も配慮の度合いが高い表現とされているのか、聞き手

の観点から判断を行った研究は管見の限りすくない。従って、本研究では聞き手の判断を基準にして表現選択の配慮の度合いを探る。

以下、アラビア語と日本語の代案提示表現とその例文である。

意味公式の分類	意味公式の内容及び例
日本語「代案提示」	<p>別の解決案を出すこと。 例) **にあたってください。 **に聞いてもらっていいですか。 **に頼んでみて！</p>
アラビア語「代案提示」	<p>例) Mumken totlob mn had tany (他の人に頼んでいいですか) mfish had tany ? (他にできる人いないですか) khally had tany ye:melha. (他の人にやらせて)</p>

5. 調査情報及び調査対象者

本調査では、3つの代案提示表現の配慮の度合いを日本語母語話者とアラビア語母語話者に判断してもらおう。場面は、同僚に何か要求をしたが拒否されたとする。拒否された発話として以下の3つを提示して、配慮の度合いが高い順に並べてもらう。

1. すみません、今忙しいんで他の人に頼んでください。
 (命令形)

2. すみません、今忙しいんで他の人に頼んでみたらどうですか。（提案）
3. すみません、今忙しいんで他の人に頼んでもらっていいですか。

（許可求めによる授受補助動詞）

調査実地期間は 2020 年 4 月～7 月の間で、調査対象者として、20 代～30 代の日本語母語話者とアラビア語母語話者それぞれ 8 名（女性 4 名、男性 4 名）を対象に選択式のアンケート調査を行った。日本語母語話者に日本語の調査を行い、選択肢の順番は「①命令形、②提案、③許可求め」で、アラビア語母語話者にアラビア語の調査を実施し、代案提示として用いられることの多い「①命令形、②疑問形、③許可求め」という順番に選択肢を提示した。

6. 調査結果と考察

6.1 日本語の代案提示

被調査者	配慮の度合いが高い順
5 名（女性 4 名、男性 1 名）	③「許可求め」②「提案」、①「命令形」
3 名（男性 3 名）	③「許可求め」①「命令形」②「提案」

配慮の度合いが高い順に③、②、①を選んだ被調査者が 5 名で、③、①、②の選択は 3 名である。このことから、性別を問わず日本語の代案提示表現として授受補助動詞が最も配慮の度合いが高いとされていることが分かる。選択肢 3 の授受補助動詞は相手に許可を

求め、かつ言葉上は決定権を委ねており最も丁寧と見なされている。被調査者の回答の理由として、「～たらどうですか」は提案という形ですが、捉えようによっては受けるつもりが全くないように聞こえるとみなされている。また、命令形の「～てください」は相手との距離を感じるという回答も得た。

筆者が 2015 年では日本語の特徴的である恩恵を表す授受補助動詞が代案提示に後続することを観察し、発話者自信に利益がないにも関わらず、利益があるかのように表現することは、「他者との距離を最小限にせよ」という新たな配慮の原則が働いていることを指摘した。

砂川（2005）では「～てもらっていいですか」は単純な質問ではなく、依頼表現としての使い方が定着していると述べ、丁寧な依頼と受け止められるのが普通だとしている。また、「～てもらおう」を含む恩恵と許可求め表現をあわせて使うことによって、相手にお伺いを立て、それによって指示や依頼の押し付けがましさを軽減しようという気持ちが働いていると述べられている。

また、授受補助動詞が、山岡・牧原・小野（2010）では、依頼発話の中では配慮表現として認定され、依頼における配慮表現について詳しく論じられたが、要求を拒否する際に用いられる授受補助動詞の使用について取り上げた先行研究が管見の限り少ない。本研究では、代案提示として用いられる授受補助動詞が FTA を軽減する働きを持ち、配慮表現として認定できると考えられる。しかし、先行研究で指摘された依頼発話における授受補助動詞とは、異なるメカニズムで配慮

表現として機能すると思われる。例えば、以下の例文が挙げられる。

(3) ごめん、忙しいので他の人に頼んでくれる。

(4) ちょっとコピーする時間ないからごめん。他の人
にお願いして
もらっていい？

リナ (2015)

上記の例文から分かるように、日本語では話者には直接的に利益がないにも関わらず、利益があるかのように授受補助動詞が使用されることが分かる。話者に直接的に利益があるとき、授受補助動詞が使用されるのは恩恵を明示的に表すためであり、または、日本語は代表的な高コンテクスト文化⁽³⁾であるため、「話し手は自分自身がコンテクストの一部であるのでコンテクストに埋もれた視点で場の情報を読み取る」からである(井出 2006)。しかしながら、利益がないときには、一体なぜ授受補助動詞が使用されるのか、どのような配慮のメカニズムが働くのか、そしてどのようなポライトネスと配慮の原則が有効なのかについて、十分に言及されていない。

筆者は恩恵を受けてない発話者による授受補助動詞の使用は、「他者との距離を最小限にせよ」という新たな原則で記述できるのではないかと考えられる。具体的に述べると授受補助動詞は本来発話者自身に利益があるとされているが、要求に対する代案提示における授受補助動詞では利益は完全に聴者にある。しかし

、発話者が聴者の利益は自分の利益であるかのように表現し、聴者との距離感を縮めることで配慮を示そうとするのではないかと考えられる。

6.2 アラビア語の代案提示

被調査者	配慮の度合いが高い順
4名（女性3名、男性1名）	②「疑問形」、③「許可求め」
4名（男性3名、女性1名）	③「許可求め」②「疑問形」

配慮の度合いが高い順に②「疑問形」、③「許可」の選択は4名で、③「許可」②「疑問形」の順も4名だった。性差の違いを見てみると、女性は「疑問形」の方が配慮の度合いが高いと見なしているのに対して、男性は「許可求め」の方が配慮の度合いが高いと見なしている。つまり、アラビア語では性差の違いによって傾向が異なる。一方、被調査者全員に選択肢①の「命令形」は全く配慮を示さないものであり、非丁寧な表現と見なされることが明らかとなった。つまり、アラビア語では相手の要求に応じることができないときには、疑問形や許可求めによる代案提示が丁寧な言い方であり、配慮表現として認定できると思われる。疑問形による情報求めの選択肢の理由として、自分のことのみを優先するのではなく、要求側の利益の達成も大事にしていることが伝わり、思いやりのある代案

提示という回答が得られた。許可求めを表す「Mumken」が最も丁寧であると見なした被調査者が相手に結論を委ねる表現であるため最も丁寧な表現という回答が得られた。つまり、イエスかノーの判断を聞き手に委ねることで、聞き手に対する配慮を示そうとする心理が働くと言える。このことから、日本語もアラビア語も相手に結論を委ねる表現の配慮の度合いが高い点で共通していると言える。一方、「～てください」は日本語とは異なり、アラビア語の調査では全く配慮の機能を有していないという点で両言語が異なることが明らかとなった。

7. まとめと今後の課題

本研究では、表現選択に着目し日本語とアラビア語の代案提示表現の丁寧さ・配慮の度合いの観点から対照した。その結果、日本語では恩恵を受けていない発話者による「授受補助動詞」の許可求めが最も配慮が高い表現となっていることが分かった。一方、アラビア語は許可求めを表す「Mumken」と同様に疑問形による情報求めを用いることにより、相手に配慮が伝わる。

今後の課題として、研究目的にあった配慮表現の原則の分析を中心に考察を深めていきたい。また、親しい人間関係における代案提示の使用の特徴を探りたい。さらに、結果を一般化できるように、被調査者の人数も増やしていきたい。最後に研究成果をどのように日本語教育の現場で活かすことができるかを深く考察したい。

Notes:

- (1) 語用論とは、「言語学の諸部門のなかで、発話の効力が発生するメカニズムを探求する部門である」（山岡・牧原・小野 2010 : 11)
- (2) 本研究では扱うアラビア語は、エジプト方言アラビア語であり、エジプトにおいて日常生活で使われている口語のアラビア語であり、アンメヤと呼ばれている。
- (3) 言葉や言語に依存するのではなく、文脈的情報に依存する文化のことである

参考文献

- 東照二(1995)『丁寧な英語・失礼な英語—英語のポライトネス・ストラテジー—』研究社
- 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』79: 41-52.
- 石井敬子・北山忍(2004)「コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係—文化的視点による実証研究のレビュー—」『社会心理学研究』19: 241-254.
- 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』大修館書店
- 伊藤恵美子(2006)「日本人は断り表現において丁寧さをどう表現しているか—長さと適切性からの分析—」『異文化コミュニケーション研究』18: 145-160.
- 宇佐美まゆみ(2003)「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54(3): 117-132.
- 佐藤慎司・熊谷由理(編)(2013)『異文化コミュニケーション能力を問う—超文化コミュニケーション能力をめざして—』ココ出版
- 砂川有里子(2005)「『～てもらっていいですか』という言い方—指示・依頼と許可求めの言語行動」小泉保著『小泉保博士傘寿記念論文集 言外と言内の交流分野』大学書林
- 西田ひろ子(2000)『異文化間コミュニケーション—人間の行動原理に基づいた—』創元社
- 西田司・グディカンスト、W. B.(2002)『異文化間コミュニケーション入門』丸善

牧原功 (2012) 「日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー」『群馬大学国際教育・研究センター論集』11: 1-14.

山岡政紀 (2004) 「日本語における配慮表現研究の現状」『日本語日本文学』創価大学日本語日本文学会 14:17-39.

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) 『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』明治書院

山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2018) 『日本語語用論入門-コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院

リナ アリ (2013) 「エジプト人大学生と日本人大学生の「依頼」、「勧誘」に対する「断り」の対照研究—ポライトネスと意味公式ストラテジーの観点から—」筑波大学人文社会科学国際地域研究専攻修士論文

リナ アリ (2015) 「日本語とアラビア語の断り発話を正当化するメカニズムについて-異文化間語用論と配慮表現の観点から-」筑波大学国際日本研究専攻博士論文

Almany, A., and Alwan, A. (1982) *Communicating with Arabs*. Prospect Heights, IL: Waveland Press.

Beebe, Leslie M., T. Takahashi (1989) Sociolinguistic variation in face-threatening speech acts. In M. R. Eisenstein (Ed.), *The dynamic interlanguage: Empirical studies in second language acquisition*. New York: Plenum Press. 199-218.

Beebe, Leslie M., Tomoko Takahashi and Robin Uliss-Weltz (1990) "Pragmatic Transfer in ESL Refusals". In Robi Scarcella, Elaine Anderson and Stephen Krashen

(eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*. 55–73. New York: Newbury House.

Brown, P and S. Levinson. (1987) *Politeness*.

Cambridge: Cambridge University

Leech, G. (1983) *Principles of pragmatics*. Longman